

書評

カフカ [著], 高橋義孝訳 『変身』 改版 (新潮社, 1985)
(新潮文庫 ; カー1-1).

文学部文学科ドイツ文学専攻 3年 正月 瑛

カフカの作品において決して欠かすことの出来ないキーワード、それは「疎外」ないしは「孤独」であろう。形式は問わず、様々な種類の疎外・孤独を彼は一貫して描き続けた。ある時は一人、檻の中で四〇日間の断食を執行したり(Ein Hungerkuenstler 断食芸人)、またある時は身に覚えの無い裁判にかけられ、犬のように死んで行く(Der Prozess 審判)。そしてある獣は何十年も地中の洞穴を一人で改築し続ける(Der Bau 巣穴)。

本書においても例外ではない。とある外交販売員グレーゴル・ザムザは目覚めの悪い朝、突如として醜悪な毒蟲へと成り果てていた。家族から見放されたグレーゴルは部屋に閉じこもり、散々な仕打ちを受けて死ぬ。この構図だけを取り上げると、何か酷く不条理な展開が淡々と進んでいくだけのつまらないファンタジーに過ぎない、とでも思ってしまう。「これは現代の引きこもり症候群の到来を予言していたのだ」とも取れるかもしれない。だが本書において特筆すべき点はただ一つ、意思疎通をするということの困難性を暗示的に、しかし明確に表現していることであろう。グレーゴルの声はもはや獣のようで、人間としての意識はまだあるにも関わらずまともなコミュニケーションは不可能である。家族を困らせるつもりなど毛頭ないのに、言葉を持たないために嫌悪される。グレーゴルが死ぬ間際のシーンでは彼の父が「こいつがわたしたちのことをわかってくれさえしたら」と、何度も繰り返す(八六項)。伝わらない、ということがこんなにも辛いことであろうか。つまりこれは異種間の不理解という型を借りた、人間の意思疎通や相互理解の困難性、ならびにそれに伴った深淵な孤独を表した作品であるのだ。

情景描写という点でも目を見張るものがある。冒頭、虫になったグレーゴルがベッドから降りるのに悪戦苦闘するシーンの、現実には決して体験し得ないことであるのに、何故だかそれをリアルに感じてしまうような緻密な描写など、カフカの他に誰が描けよう(しかも彼は挿絵に虫そのものを描くことを禁じた。これは読者の想像力に対する挑戦なのだろうか、はたまた文章がある一つの完成された虫像への想像をかき立てるに充分な説得力を持っているであろうという自信なのか、それはわからない)。また、ぞんざいに扱われながらも家族の変化に聞き耳を立てて一喜一憂しているグレーゴルの心理なども興味深く追いかけていける。

百年近く前の作品だが、ひょっとしたら現代の個人主義的孤立社会においては、(皮肉なことながら)当時の読者よりも多くのシンパシーを我々は感じる事が出来るかもしれない。扱っているテーマが普遍のものである限り、作品は時代を超越する。本書は図書館には必ず置いてあるし、書店でもワンコインでおつりが来るほど安価で並んでいるため、機会があったら是非手に取ってほしい。